

# ロクでなしロッキー

Yasushi

[1] ファンクラブ(14歳)

「ゴーストライター」はヒットチャートに登場するようなメジャーなバンドではなかった。しかし、<sup>2009</sup>年にアメリカでデビューしたとき、その個性的な曲たちは、一部の熱狂的なファンを生んだ。

日本でも、数こそ少ないものの、いくつかのファンクラブができた。「ゴーストライターFC関東支部」が設立され、初めてのイベントが開かれた。そこで配られたメンバーの名簿を見て、四人はお互い同じ中学校に通っている事を知った。

\* \* \*

早朝。電線にとまったつがいの雀が、青空を背にさえずっている。東京足立区のとある下町。

「おはよう。ねえ、名簿見たよ。ロクも入ってたの? 『ゴーストFC』に「トレーナー姿の鏡優美」かがみ ゆみ」が、歯を磨きながら、堀越しに声をかけた。

隣の家の庭では、背が小さく首も短い少年が、ジャージを着て体操をしていた。藪中禄太郎「やぶなか るくたろう」だ。

「つたりめーよ。ちきしようめ」禄太郎は無愛想に答えた。

「ロクが、ゴーストを聴いてたなんて知らなかったよ」

「ロクじゃなくロッキーって呼べ。おれは違いの分かる男なんだよ。良い物はすぐにわかるんだ。ちきしようめ」禄太郎は体操を続けながら言った。

「いや、今どき、毎朝ラジオ体操してる人なんて他にいないからさ、やっぱりロクって変人だなんて思ってたけど、ゴーストのファンだなんて見直しちゃったよ」

「優美こそ、ゴーストの良さがわかってんのか? ちきしようめ」

「それこそ『つたりめーよ。ちきしようめ』、だよ」優美は、泡の付いた唇を尖らせて、禄太郎の真似をした。

「ロクさあ、顔剃らないの? いつの間にか、ヒゲが目立つようになっ  
てきたじゃん。それと、眉毛の間、まめに剃った方が良いよ。繋がっ  
てるじゃない。まるで『こち亀』の両津勘吉だよ」

「ほっとけ。ちきしようめ」

優美は左手に持ったカップの水で口をすすぐと、扉に一步近づいた。「ねえねえ。名簿見たらさ、うちの海老原中学にはあと二人FCのメンバーがいるんだよ。それも同じ三年生。名前見たけど顔が浮かばないんだよねえ。ロクは知ってる？」

「知らねえよ」

「きょうさ、探してみようよ。もし雰囲気良い人たちだったら、そのままゴーストのファンサークル作るうかなって思ったんだ」

「勝手にしろよ。ちきしょうめ」禄太郎は相変わらず無愛想だったが、優美は慣れっこだった。

## [2] 幼なじみ

禄太郎は、ぶっきらぼうなせいか友だちが少なかった。勉強をほとんどしないので、成績もひどく悪い。夏休みや冬休みは決まって補習を受けさせられていた。

中学校の三年間で停学が四回。そのうち三回は喫煙が見つかったのと、あと一回は従兄のバイクで走っていて警察に補導されたためだ。かといって不良仲間とつるんでいるわけでもなく、孤独だった。

そんな禄太郎だから女友だちなどいるはずもなく、唯一親しく話してくれるのが、隣の優美だった。幼稚園からずっと一緒に幼なじみで、海老原中学に通う今はクラスも同じだ。

優美は小さい頃から可愛らしい子どもだったが、中学生になると一段と大人びて、近所でも評判の美人になっていた。優美と禄太郎は、しばしば一緒に登校していたが、あまりに不似合いなので、口性のないおばさんたちは「美女と野獣ね」などと言って笑っていた。

## [3] 登校

「行ってきま〜す」セーラー服の優美が玄関を出ると、ちょうど学生服の禄太郎も家を出たところだった。今朝もたまたま同じタイミングだったので一緒に登校になった。

「ういっす、ロク。不思議と玄関出るの一緒になっちゃうんだよね。何でだろ」歩きながら優美は言った。

「けっ」禄太郎はそっぽを向いた。

「ねえねえ、どんな人たちだろうね、あとの二人？」

優美の言葉に、禄太郎は何も答えなかった。

「けっ」敷中家のベランダの窓から、父親の藤郎「ふじお」が見送っていた。

「ロクのやつ行きやがったよ」

母親の典子が皿を布巾で拭きながら、

「毎朝、玄関に座り込んで耳を澄ましてるんだから、ご苦勞な事よね」

「優美ちゃんに迷惑がられる前に止めやがれてんだ。思ってる事を言う度胸もないくせに、高望みしやがって」

「そうだねえ。でも、ロクもいつの間にか大きくなったもんだね。背はちっとも伸びなかつたけど」

#### [4] 出会い

給食を食べ終えて昼休みになったときだった。優美のD組の教室に見知らぬ男子生徒が訪ねてきた。知り合いの生徒を見つけ、

「よっ、市川。このクラスに鏡さんっているだろ？ どの人？」と訊いた。

教えられたその少年は、優美の机の所にやってきた。後ろに、やはりクラスの違う女子生徒が、くっついてる。

「鏡さん？」

優美は見上げた。長身の少年が優美を見下ろしている。

返事をしようとして開けた口が、そのまま凍ってしまった。(うわ！

良い男。めっちゃタイプだ)

「鏡さんだよね？」

「う、うん。そうだけど」

「ゴーストFCの名簿を見たんだ。ぼくはA組の横尾広志」ひろっ」

広志の後ろに付いてきた目の大きな可愛い女の子がひょいと横から顔を出し、Vサインを見せた。

「あたしは向井由香。B組なんだ。よろしくね」

「同じ中学だから、ちよっと挨拶しようと思ってるね。さっき、この向井さんも見つけてきたんだ」と微笑みながら広志。

優美はドキドキしている自分にとまどった。(何、これ？)言葉が出ない。

由香が、

「あ、もしかして、いきなり押しかけてきて気を悪くした？」

優美はあわてて、

「あ、違う、違う。あのね、実はわたしも名簿見て、きょう探そうと思つてたところなのよ。もう一人紹介するね」周りを見回して、禄太郎を探した。禄太郎は、窓枠に腰掛けてマンガを読んでいた。

「ロク！ ちょっと来て」

由香は、ずんぐりむっくりに一本肩の禄太郎を見て、（うわ、不細工。ちよつとアレよね〜）と思つた。

禄太郎はぎよろりと優美を見て、歩いてきた。

「こいつ、藪中禄太郎。あたしの友だちなんだ。見かけによらずゴーストFCに入つてるのよ。ロクって呼んで」

「ロッキーって呼べよ。ちきしょうめ」ロクは答えた。

「何？ ロッキーって？」と由香。

優美は説明した。

「いや、ロクはさ、映画の『ロッキー』が大好きなのよ。自分もあいう風になりたいんだって。だから名前に引つけてロッキーって呼べつてうるさいんだ」

「そうなんだ〜。でもちよつとロッキーはキツイかも」と遠慮のない由香だつた。

「藪中君もよろしくね」広志が笑つた。禄太郎は、ちよつとだけ目を見上げて、「お、おつ」と答えた。

優美はドキドキからいつもの調子を取り戻しつつあつた。

「あのね、わたし、きょう四人が集まつたら、うちの中学だけのゴースト・ファンサークルを作ろうかななんて思つてたんだ。みんな、どう？」

「良いねえ。ぜひ作ろうよ」広志が言つた。

「きょうの放課後、喫茶店に集まらない？」と優美。

「あ、ごめん。きょうは彼氏と会つんだ」由香が言つた。

「え〜、もう彼氏がいるんだ」優美は驚いた。

「違う学校だけだね」由香はあつからかと答えた。なぜか広志が、ばつが悪そうに視線を遠くにそらせた。

#### [5] 恋に落ちて（14歳）

かくして結成された四人だけの海老原中学ゴースト・ファンサークルは、週に二回ほど集まつて、ゴーストの曲を聴く例会を開くようになった。場所は広志の家だ。相当裕福らしく、大邸宅だつた。始めて訪れたときだつた。

「お母さんはいないの？」由香が訊いた。  
「親父もおふくろも妹たちも、普段はそれぞれの離れで過ごしているんだ。食事の時だけ、家の居間に集まるのさ」  
「お父さんは何やってる人なの？」  
「車屋さ。ドヨタ東日本販売の社長」  
残りの三人は啞然とした。ドヨタの阪社社長！  
由香が、  
「横尾君、良いとこのボンボンじゃん！」他の二人も頷いた。  
「そんなんじゃないよ」広志は恥ずかしそうに言った。  
広志の離れも用意されていて、防音設備が完備された映画・音楽用の部屋まであった。

\* \* \*

その防音室で、四人は毎週、心ゆくまで大音響のゴーストを楽しんだ。

英語に強い広志が、全曲の歌詞を日本語に訳してくれた。みんな尊敬の眼差しで広志を見るようになった。

中でも優美は、落下するジェットコースターのように、急速に広志に惹かれて行った。

いつも、一時間くらい経った所で、広志が腰を上げた。「お茶を用意してくるよ」

すると決まって、

「わたしも手伝う！」優美が、子犬のようにくっついて行った。

「ロク」ある日、由香が言った。禄太郎は返事をしない。

「優美だけど、ありゃ、相当いっちゃってるね。好き好きオーラが溢れ出てるよね」

「ロッキーって呼べ。おれそんな事知らねえよ。ちきしょうめ」いつも以上に、吐き捨てるような口調で禄太郎は言った。

「だけどなあ。このまま傷つくのを見るのもなあ……」と由香。

禄太郎は、由香の顔を見た。

「どつという意味だよ？」

「考えたらわかるじゃん。広志みたいに格好良くて頭の良い男、彼女の一人や二人いて当然でしょ。もしそうなら、早めにあきらめたほうが傷が浅くてすむかもね」

「向井、何か知ってるのか？」

「勘よ勘。女の勘」由香は立ち上がって、部屋を見まわした。

「たとえば、このカレンダー、この部屋の雰囲気から、かなり浮いて

ない？」たしかに、瀟洒な装飾品ばかりが並ぶこの部屋に、「仙田工務店」のカレンダーは不似合いだった。

「めくってみましょう。」由香はペロリとカレンダーをめくった。カレンダーの背後の壁に写真が貼ってあった。

「あちゃー、見事にあったねー！」笑顔の妖艶な美しい少女が、広志の首に抱きついて頬にキスをしている写真だった。少女の瞳の色は、紫色だ。髪は鮮やかなブロンドだった。広志も幸せそうに笑っている。

「ね？ わたしの勘は正しいでしょ？」由香がにっこりして禄太郎を見た。「それにしても、この子ハーフかな。綺麗だね」

「けっ」禄太郎はそっぽを向いた。

由香は、写真を留めたピンをそーっと抜いて、裏を見た。万年筆の走り書き。

From ジュリア景塚  
with love 2009/1/16

「日付、今年の正月じゃない？ 『景塚』って名前、変わってるよね。あの景塚「かげづか」グループと関係があるのかな」

「知らねえよ、ちきしょうめ」

「うちに帰ったら、お兄ちゃんのパソコンでネット検索してみようっ  
と」

\* \* \*

翌日の昼休み、ポケットに両手を突っ込み首をすくめて歩いていた禄太郎に、由香が声をかけた。

「ロク！ わかったよ、あの子。景塚グループ中核の景塚貿易社長、景塚真一郎の一人娘なの。母親がアメリカ人よ。美知川中学の二年生だっ  
て」

「……………」禄太郎は黙って何かを考えていたが、ふーっとため息をついた。

## [6] お節介

数ヶ月が経ち、年末が次第に近づいていた。

「ね、ロク」ある登校時、優美が禄太郎に話しかけた。無愛想な禄太郎は、例によって返事をしない。

「進路は決まったの？」少し心配そつだ。停学四回では内申書はかなり悪いに決まっているし、相変わらず補習の常連客の禄太郎の事だ、学区内でもかなり下の高校しか選択肢がないに違いない。

「ロッキーって呼べ。おれは高校には行かねえよ。ちきしょうめ」禄太郎は首をすくめた。

「えっ？　じゃあ、どうするの？」

「川口にある叔父さんの資材工場で働くんた。高校には行かねえ。というより、行ける所がねえんだ。ちきしょうめ」

「すごい。もう働くんた。大人なんだね。ロクが光って見えるよ」優美が感心した声で言った。

「お、おめえはどうするんだ？」禄太郎が尋ねた。

優美はため息をついて目を伏せた。きれいに揃った長いまつげが目立つ。

「偏差値では区立大浜高校なのよ。でも、その一ランク上の区立清音高校に行きたいんだ」

「何でだよ？」

「……」優美は黙っていた。

「横尾だろ？　横尾が清音に行くからだろ？　ちきしょうめ」

優美は、さつと顔を赤らめた。

「横尾はやめとけ」禄太郎は、声を低くして言った。

「え？」と優美。

「あいつには彼女がいるんだ」

禄太郎の言葉に、優美は凍り付いて立ち止まった。

「ほんとなの？」

「きょう集まったときに、もし部屋に一人になったら、カレンダーをはぐって、壁に貼ってあるものを見る」

\* \* \*

夕方、いつものように、広志の家でゴースト・ファンサークルの例会が開かれた。大音響でゴーストを聴きながら、音楽雑誌などの片隅に小さく載っているゴーストの記事を切り抜きスクラップ・ブックを作る。楽しい作業だ。

由香はきょうは彼氏とデートという事で、来ていなかった。

小一時間ほど経った頃、広志が「お茶を入れてくる」と言っ立った。いつもなら「手伝っ！」と言っ付いて来る優美が黙っている。広

志は不思議そうな顔をした。

「おれ、トイレ」 禄太郎も立ち上がった。 広志は我に返って背を向けた。二人は部屋を出た。

五分ほどで禄太郎が戻った。 優美は元の場所に座っていたが、顔色が真っ青で、表情が失せていた。

\* \* \*

禄太郎と二人で帰る道すがら、優美はずっと黙っていた。 我慢出来ずに禄太郎が口を開いた。

「み、見たんだろ？ ちきしょうめ」

こつくり、と優美が頷いた。

「向井の話だと景塚貿易の社長令嬢だってよ。 金持ち同士、似合いのカップルじゃねえか。 ちきしょうめ」

急に優美が深呼吸した、と思ったら、それはしゃくり上げだった。 涙をぼろぼろこぼして、優美は泣き出した。

「な、泣くんじゃねえよ。 ちきしょうめ」

「だって……だって、それでも好きなんだもん……」 優美は鼻をすすりながら、ハンカチで目を覆った。

## [7] 本当のこと

「こらあ！ ロク。 ちょっと来い！」

翌日の昼休み、D組の教室に鬼のような表情で由香が乱入してきた。

禄太郎の詰め襟をつかむと乱暴に引き寄せながら、教室の外に連れ出した。 足音を響かせて歩いていく。 優美は驚いて立ち上がり、ドアの所で廊下を遠離っていく二人を見ていた。

「な、何だよ、向井。 やめろよ」

「うるさい！」 由香は完全にキレていた。

\* \* \*

すぐ後に、広志がD組にやってきた、

「あ、優美。 由香が来なかった？」

「来たよ」 本当は広志と言葉を交わすのが辛い気分だったが、突然の事に、気が動転しているせいで普通に返事が出来た。

「ロクを引きずってあっちに行った」

「追いかけてよう」

「ええ？」

「ほら！来るんだ」広志が優美の手を握って引いた。初めてつないだ手。胸が高鳴り、優美の頬は真っ赤になった。

\* \* \*

由香が禄太郎を連れて行ったのは、誰もいない音楽室だった。

「ロク！あんた、優美に広志の彼女の事話したでしょ!？」

禄太郎を睨み付けながら叫んだ。禄太郎はその気迫に気圧されて、声が弱々しくなった。

「……ああ、話したよ。ち、ちきしよめ」

「何でそんな事したのよ!？」

「……だ、だつてよつ、優美があんまり広志に熱を上げてるから、早く知った方が傷が浅くてすむんだろ？向井が言ったんじゃないか。ちきしよ……」

「バカ!!」由香が禄太郎を遮った。厳しい口調で禄太郎に話した。

「男だったら広志の気持ち判らないの？何でわざわざジュリアの写真をカレンダーで隠したりするのよ？優美に見られたくないからよ。だったら、壁からジュリアの写真を取っちゃえば良いと思うかも知れないけど、それも出来ないの。まだジュリアの事も好きだから。」

あのね、広志も優美の事まんざらでもないの。いまは揺れてる微妙なところなのよ。だから隠すの。ほんとにジュリアだけが好きなんだつたら、最初から話してるだろうし、写真もアルバム毎、見せてくれるわよ」

「そ、そんな事知るかよ。ちきしよめ」

「この、ボキヤ貧！何かと言えば『ちきしよめ』を付ければ良いかと思つて。もううんざりよ。別の言葉にしてくれない？」由香は振り乱した前髪を、手でかき上げた。

「どうせ女友だちどころか、友だち自体ほとんどいないあんたの事だから、女の子と付き合つた事もないんでしょ？だから広志の気持ちも優美の気持ちもわからないのよ！それよりわたしが許せないのはね、あんたが自分の気持ちの事を最優先して、広志を優美から遠ざけようとした事よ」

「な、何？」禄太郎はうろたえた。

「わたしは今の彼氏で五人目。無駄に恋愛を重ねてきたわけじゃないの。見ていればわかるのよ。あんた優美の事が好きなんですよ」

「ち、違つぞ！ちきしよめ」禄太郎が小さな体を震わせながら叫

んだ。

「いいや、違わない。わたしには簡単に判る。ロクは優美が大好きなのよ。ただ、それを言う勇氣はない。だけど、優美は誰かのものになって貰いたくない。だから、優美が広志の事を好きになったら、あきらめさせようとする。要するにロクは卑怯者なのよ。ロクはロクでも『ロクでなし』よ。優美がどんな悲しい思いをしたと思う？ 映画のロッキーがそんな事する？ 最低の愛し方だよ！ このロクでなし!!」

バーン！ 引き戸が開いて、優美が飛び込んできた。

「もうやめて!!」泣いている。泣きながら由香をとめた。

「由香、ありがとう。でも、もうそれ以上ロクの悪口言わないで！」

ロクは、みんなの知らない良い所が、たくさんあるんだよ。強がりばかりで、ほんとは意気地もないし、喧嘩も弱いのに、小さいときから、何度も体を張ってわたしを守ってくれたよ。

わたしがおしゃべりだから、いつも聞いてないふりしてるけど、本当は全部聞いてくれているのも知ってる。だって、どんなくだらない話でも同じ事を二回言ったら『それ先月言ったぞ』とか突っ込んでくれるもの。一生懸命聞いてくれてるんだよ。そんな事、みんな知らないでしょ？

ロクは、確かに由香の言うとおり、女の子の気持ちはわからないかも知れない。でもわたしの気持ちはいつもわかってくれるし、わたしにはとても優しいの。その事をよく知っているから、わたし、どんなに無愛想にされても平気なんだ」

一呼吸置いた優美は、少し言いにくそうに、続けた。

「ロクがわたしの事を好きなのは、百も承知だよ。幼稚園の頃から、もう十年以上も一緒にいるんだよ。何考えてるかなんてだいたい判るよ。ロクだって同じはず。お互いだよ。だからわたしは、ロクといるといっても安心だった。

広志の事は、いまも何が何だかわからない。最初に広志に会ったときに、頭のどこかが壊れちゃったみたい。どこにいても、何をしてても、広志の事が頭から離れないの。好きってというのは、こっぴどい事なんだって判ったよ。

彼女とのツー・ショットの写真、ショックだった。でも、それで好きな気持ちは薄らぐかと思ったら、関係ないみたい。やっぱり好きなんだよ。ただ、今は好きなのをやめなくちゃいけないって判ってるよ。気持ちを切り替えようとしているところなの」

加わるべきか立ち去るべきか、入り口の所で迷っていた広志が、思い切って近寄ってきた。

「ジュリアは」ほかの三人を見回しながら言った。「ぼくの許婚」いい

なづけ」なんだ。

小学校一年の時に親同士に引き合わされて、『この女の子がかわいいと思ったら許婚になりなさい。思わなければならなくて良い』と言われたんだ。何の事かわからず、『かわいいと思っ』と答えた。

ジュリアも同じように、ぼくの事を格好良いと思ったら許婚になりなさいと言われ、頷いた。

それが始まりだった。両方の家を頻繁に行き来するようになって、いつも兄妹のように扱われて、一緒にいる事が当然と思っようになって行った。

許婚が何を意味するのかを知ったときには、もう将来結婚する事は自分たちの中で決定事項になっていた。親父たちも、二人が結婚し、ぼくがある程度親父の会社で修行を積んだら、両社による合併企業を一つ作って、ぼくに任せるといふ計画まで立ててる。

だけど、由香の言った通りさ。優美に会ってしまった。全部投げ出して、優美の側にいたいって思うよ。一方で、ジュリアへの気持ちも変わっていない。自分でもどうして良いのかわからなくなってるんだ。ふいに静かになった。

四人は言葉が見つからず、黙ってしまった。頭上に響くチャイム。

#### [8] 第二ボタン(15歳)

冬が終わり、卒業式の時期がやってきた。猛勉強をした優美は、見事、ランク上の清音高校への合格を果たしていた。広志も清音高、由香は大浜高、禄太郎は就職、と四人はばらばらになる。

卒業を控えた半月ほど前の事、優美はいつもの「ゴースト・ファンサークル」の例会で、広志にこんな事を言った。

「広志、広志は、やっぱり今まで通りジュリアと付き合っつて、いずれ結婚すべきなんだよ。そういう風な道を歩いてきたんだから、これからも予定通り歩かなきゃだめだよ。わたしはもう大丈夫。ふっきたよ。広志を見るだけで良いよ。それで充分楽しいから。それ以上の事は、もう何もするつもりはないよ。」

だからさ、そのかわりにひとつだけ思い出をくれない？ 卒業式の日、広志が三年間身につけていた制服の第二ボタンが欲しい。それさえ貰えれば、あとは広志に出会う前のわたしに戻るよ。」

優美は言いながら笑っていた。禄太郎だけがわかっていて、優美のその笑顔が、無理に作ったものだという事を。

由香は、そんな簡単に気持ち切り替えるのは無理だよ、と思いな

がら聞いていた。ただ、ボタンのような何かアイテムがあれば、自分は変わらなくちゃ、と思うきっかけになつてくれるだろう。

広志は笑つたが、弱々しく寂しげな顔だった。

「わかつた。第二ボタンを優美にあげるよ」広志は答えた。

「やつたー！」優美は、はしゃいだ。

「良かったね！」由香が声をかけると、優美は笑顔で何度も頷いた。禄太郎には、その偽物の笑顔が痛かつた。

\* \* \*

翌日、禄太郎は、休み時間、由香に会いに行った。

「ロク……。ロクが訪ねてくるなんて初めてじゃない？ びっくりさせないでよ」

「ロッキーって呼べ。来たつて良いじゃねえか。ちきしょうめ」禄太郎も照れくさいらしい。

「あ、あのよう、向井の言う通りよ、おれは他のやつが何考えてるのか、わからねえ。だから、ひとつ教えてくれ」

「何？」

「優美は、記念と思ひ出に横尾の第二ボタンが欲しいんだよな？」

「そつだよ」

「そんな特別なものなんだつたら、横尾の金髪女も欲しがらんじゃねえのか？」

「うーん、そうねえ」

「金髪女と優美の両方が欲しがつたら、横尾はどつちに渡すんだ？」

「……」由香は、驚いて禄太郎の目を見た。考えてもみなかった。しかし充分あり得る事だ。

「あのよ。ボタンは一個しかねえんだぞ。横尾にとつてはよう、金髪は正式な許婚。優美は単なるサークル仲間だ。スジから言つたら、金髪に渡さねえわけにはいかねえんじゃねえのか？」

「ロクの言うとおりだ。どつしよつ……」由香は動揺していた。「だけど、どつする事も出来ないよ。広志の心ひとつに賭けるしかないね」

「賭けるつて、おめえ、勝負は見えてるじゃねえか。ちきしょうめ」

禄太郎は、優美の悲しい顔を想像して、舌打ちした。

## [9] 中学卒業式の日

卒業式が終わり、それぞれの教室で、最後のホームルームが開かれ

た。

全て終わって解放されると、玄関前は、卒業生、父兄、下級生が入り交じり、ちよつとした混雑になった。卒業式の特別な雰囲気には泣いている女子生徒が至るところにいた。

由香が背伸びして優美を見つけた。

「優美ー！」

優美も、まだ泣いていた。横には禄太郎がいた。両ポケットに手を入れて下を向き、何かぶつぶつ言っている。こういう場面は苦手なのだ。

優美は由香に手を挙げて応え、三人は一緒になった。

「広志にはもう会ったの？」由香が尋ねた。

「ううん。探してるけど、まだ。見つからないの」

長身の広志の事だ。人混みにまぎれてもすぐにわかるはず。見えないうちの事はここにいないという事だ。

「新校舎裏にでも行ってみる？ あいつ、モテモテだから、下級生に呼び出されて手紙とか渡されたりしてるかも」と由香。

三人は、人の群れから離れて草わらをかき分け、新校舎の裏に向かった。

校舎の角を回って、裏手に出ると驚いた。

広志が空を見上げて立っていて、その胸にプロンドの美少女が、すがって泣いている。ジュリアだ。

二人は、優美たちに気づいた。

ジュリアが広志の胸に顔を押しつけたまま言った。

「ごめんなさい。わたしったら、きつとひどい顔ね。中学校は近いから簡単に会えたんだけど、広志が行く高校は遠くて、滅多に会えなくなっちゃう。それを思うと辛くて泣いちゃった。あなたたちは、広志がいつも話している、ゴーストライターのファンサークルの人たちね」「そつよ」由香が答えた。「あなた、ジュリアね。あなたも一緒にサークルやらない？」

「あいにく、わたしはゴーストが好きじゃないのよ。唯一、音楽の趣味だけは広志と会わないようね」わずかに微笑み、体を広志から離れた。

「あー！」由香と優美が同時に声を上げた。広志の学生服の第二ボタンがない！

「広志！ 第二ボタンはどうしたの!？」由香が鋭い声で言った。

広志は口を「へ」の字にして目をそらした。

「これの事？」ジュリアがハンカチで涙を拭きながら、手の平を見せた。そこにはボタンが一個乗っていた。

「わたし、これがどうしても欲しくて、学校をサボって会いに来たの。これから毎日、持ち歩くわ」とジュリア。

「ちよつと広志！ 優美にあげるって言った約束は!？」由香の声のトーンが一段と上がった。

「ごめん。どうしてもって言われて……」

優美が、手で顔を覆ってしやがみこんでしまった。泣き出した。

由香が叫んだ。

「優美は言わないから、わたしが代わりに言わせてもらおう。

ひどいよ！ 広志！ どうしてもって言われたら約束を破るわけ？

優美が楽しみにしていたの知ってたでしょ!？」

優美が泣きながら、由香のスカートの裾を引っ張った。

「もう良いよ、由香。フィアンセだもの、広志を責めたら可哀想だよ」

「そんな約束があつたの？ 広志」ジュリアが広志に言った。「何も言わなかつたじゃない。それで中々渡してくれなかつたのね。わたし、あの人にボタンを譲らなきゃいけないの？」ジュリアも、また泣き出した。

広志は何一つ返事が出来なかつた。

禄太郎が由香に言った。

「だから言つたじゃねえか。スジから行くところなるんだよ！ ちきしょうめ」

広志を見据えて静かに告げた。

「横尾、見損なつたぜ」

[10] ロクでなしロツキー登場！

泣きじゃくる優美を間にして、三人は学校を後にした。

「ひどいよね。我慢する必要なんか無いよ。うんと泣きなよ。ジュリアも感じ悪かつたね。ゴーストの良さがわからないんだから、しょうもない女だよ」由香が言った。

「いや、ロクの言うとおり、スジからいくとボタンはジュリアのものよ。わたしもそう思う。だけどね、それがわかつていても、あのボタンだけは欲しかつたんだ。広志がずっと身につけてきたボタンだから、思い出に、どうしても欲しかつたんだ」

「うんうん、わかるよ。欲しいよね」

「うん……。わたしも泣いてたけど、ジュリアも泣いてたね。わたし、涙は平等だと思っていたけど、人によって効き目が違うんだね。勉強になったよ」鼻をすすり上げながら、優美は言った。由香は答えられずに優美の背中を優しくさすった。

やがて優美は泣きやんだ。

禄太郎は、なぜかキョロキョロと周りの様子をつかがっていた。帰宅する生徒たちが、たくさん歩いている。

「ここ左に行くぞ」

「何でこんな道を通るのよ？」

「良いから来い、ちきしょうめ。次はこっちだ」

三人はジグザグに歩き続けた。

やがて、周りに誰もいない路地に入った。

「よし、止まれ」

「一体、何よ？ さっきから」由香の口調は苛立ちで尖っている。

「黙って、言う事を聞けっつんだ。ちきしょうめ」

禄太郎は、自分の制服の第二ボタンを外して、優美に差し出した。

「と、取れよ。ちきしょうめ」

優美は微笑んだ。

「ありがとう。ロク、優しいね。ロクの制服姿もこれが最後だもんね。ロクと毎朝通った中学校だったよね。わたし、このボタンも欲しかったよ。嘘じゃないよ」

「広志の代用品としてはパワー不足だけど、ロクの学生生活はこれで最後だもんね。そういう意味では、価値のあるボタンだよ」由香が言った。

「ば、馬鹿野郎！ ち、違うんだよ！ ちきしょうめ！」禄太郎が怒鳴った。

「ちよつと、ちよつと。何で急に怒るのよ？」と由香。

「おれのボタンなんかくれてやっても、嬉しくも何ともねえ事くらいわかってら！ これはおれのボタンじゃねえ。横尾の第二ボタンだ！ ちきしょうめ！」指でつまんだボタンを突き付けながら、禄太郎は怒鳴った。

「え〜っ!？」優美と由香が素っ頓狂な声をあげた。「どっいっ」とっ」

「くすねたんだよ」

「な、何〜〜!？」

「この間、由香に言ったように、こんな展開くれえ読めてたじゃねえか。だから先週、横尾のクラスが体育やっつてるときに、授業中トイレに行くフリして横尾の教室に忍び込んだんだよ。そして、あいつの第二ボタンとおれの第二ボタンをすり替えたんだ。これは、真正正銘、横

尾が三年間身につけていたボタンだ！ わかったか。三人だけの秘密だぞ。ちきしょうめ！」

禄太郎は、ボタンを優美の右手の中に入れて、しっかりと握らせた。優美は感極まつて左手で口を覆った。潤んだ目から、再び、どっと涙が溢れた。

「ロク~~~~!! ありがとう！」そのまま、禄太郎に抱きついた。

禄太郎は、初めての体験にあわてた。

「やめる！ 離せ！」

「ロク~~~~」

泣きながらしがみつくと優美の力は意外なほど強く、小柄な禄太郎は振りほどく事が出来なかった。

珍しく由香まで涙ぐんでいた。

「くすねた……？ そこまでやるかあ？ まったく泣かせる。『ロクでなし』だよ。こんなウルトラCは、ロクじゃなきゃ出来ないね。きょうだけはロッキーって名乗っても許すよ。『ロクでなしロッキー』だね」

禄太郎は、顔を真っ赤にして、もがき続けていた。

「ゆ、優美！ 離せ！ 離さねえとボタンをあいつに返しちまうぞ」

やつと優美は禄太郎を解放した。

由香が、薬指で目元を拭いながら、首をかしげた。

「待てよ。という事は、ジュリアが大切そうに『これから毎日、持ち歩くわ』って言った、あのボタンは……」

「おれのボタンだ」と禄太郎。

由香は爆笑した。片足で地面をバンバンと踏みならし、身をよじって笑った。

「ははははは……ひ、おなか痛い。傑作だ。こんなに良く出来た笑い話なのに、人に言えないのが辛いよ」

禄太郎もニヤリと笑いを浮かべた。

優美だけが泣き続けていた。きょうは色々な涙を流したけど、最後が嬉し泣きだなんて。

### [11] 進路(18歳)

その後、広志と優美は、気まずさから、互いに相手避けるようになり、四人のゴースト・ファンサークルは自然消滅した。しかし、広志を除く三人は、時々連絡を取り合っていて会い続けた。

\* \* \*

「わたし、結婚したんだ。籍を入れただけで、式も披露宴もやってないけどさ。これからは『迫水由香』『さこみずゆか』という事でヨロシク」半年ぶりの再会。行きつけの喫茶店で由香がポツリと漏らした。高校三年の夏だ。

「結婚!？」優美が驚いて尋ねた。「もしかして、できちゃった婚、って奴?」

「違う、違う。わたしとしては、別に今まで付き合ってきた男と同じスタンスで見てるんだけど、今回の男が独占欲が異常に強くてさ。とにかく籍を入れたがって、根負けしちゃったのよ」

「ふーん」優美はオレンジ・ジュースに口を付けると、しみじみと言った。「みんな、どんどん変わって行くみたい。ロクも『仕事人!』って感じださ」

優美の隣に、禄太郎が座っていた。油と泥にまみれたつなぎの作業服を身にまとい、真っ黒に日焼けしている。ずんぐりして背が小さいのはそのまま、サイズがないのか、作業服の手足は幾度も丸めてまくってあった。

「ロク、仕事キツイ?」由香が尋ねた。

「ロッキーって呼べ。キツイなんてもんじゃねえよ。きょうは材料置き場から鉄筋を圧延機まで運んだんだ。重さが一本35キロ。それを百往復以上したんだぞ。へたると後ろの連中がつかえちまうから、監督に怒鳴られてよ。ちきしょうめ」

「監督って、ロクの叔父さんなんでしょ? それなのに怒鳴られるの?」  
「つたりめーよ。ちきしょうめ。叔父さんだから厳しいんだよ。身内に甘くしたら、他の連中にしめしがつかねえだろ」

背丈こそそのままだが、禄太郎は、中学の頃より二の腕もぐつと太くなり、たくましくなっている。今も毎朝、ジャージでラジオ体操をしているので、優美は時々堀越しに話をしている。だが、こうして近くで見ると、ロクの体はすっかり大人になっている事に気がついた。

「優美は進路はどうするの?」由香が尋ねた。

「U大を受けようと思ってる」  
それを聞いて、由香はジュースのグラスを揺らしながら、少し考えていた。

やがて、訊きにくそうに口を開いた。

「もしかして、広志もU大じゃないの?」

「直接話した事はないんだけどね。人づてにそう聞いた」

「広志とジュリアは変わってないんでしょ?」

「うん。ブロンドの彼女がいるって事で、学校では超有名」

「それなのに、まだ忘れられないの？」由香は少しあきれた。禄太郎は黙って聞いていた。

「それ以上言わないでよ。こんな場所で泣きたくないよ。わたしは広志が見える所にいたいんだ。ただそれだけ」優美がポツリと言った。

\* \* \*

優美はU大に進学した。大学はさすがに広く、広志を見かける事はほとんどなかった。何度かジュリアと手を取り合って並木道を歩いている姿を見た。見ながら、優美は寂しそだった。

青森にいる優美の祖父母が、衰えて自分たちだけで暮らす事が難しくなってきた。優美の両親は、いまの東京の家を売って、青森に祖母と暮らせる家を建てる事にした。両親が青森に行ってしまったので、優美は大学の近くにアパートを借り、一人暮らしを始めた。

由香は、相変わらず忙しい女だった。離婚と再婚をして、名字が「迫水」「向井」「五十嵐」と変わった。遊びに行った温泉宿で巡業劇団の時代劇を観て、出演していた五十嵐という男に一目惚れしたのだという。そのまま一座と一緒に巡業する毎日になり、連絡が取れなくなってしまった。

四人ともそれぞれの道を進みながら、四年間があっという間に過ぎた。

[12] 大学卒業後のバレンタインデー(22歳)

ひと言で良いから、広志と言葉を交わしたい。大学の卒業が近づくとつれ、そんな思いが優美の中で強くなって行った。

広志は以前言っていたように、親の経営するドヨタ東日本販売に就職して帝王学を学んでゆくはずだった。大学を選んだときのように、何も出来なくて良いから広志の見える所にいたいと思った優美は、ドヨタ東日本販売の入社試験を受けたが落ちた。もう一つ受けた商社、芦沢物産には合格した。春からは都心の勤務となる。

(とうとう最後なんだね)優美は思った。

せめて「さよなら」だけでも直接言いたかった。卒業をひかえた最後のバレンタインデーに会おうと決めた。

夜中までかかってチョコ・ケーキを焼いた。大きすぎず小さすぎず、目立ちすぎず控えめすぎず、上手ではないかも知れないが、自分出来るベストの出来映えだった。ケーキを通して等身大の自分を見て欲

しかった。

そして、ひと口で良いから、自分が料理したものを食べて欲しかった。それくらいのおさやかな「はなむけ」は許されても良いだろう。

午後、優美は、広志の研究室に行ったが、広志はいなかった。電車で、思い出がいつぱいの自分の町に帰り、広志の家に行った。ドアベルのボタンを押したが、誰もいないようだった。優美は門の前で待つ事にした。

陽が傾いてきた頃、広志が帰ってきた。ジュリアを連れてくる。ジュリアも21歳だ。凄みのある美人に成長していた。どう見ても綺麗な白人女性で、半分日本人の血とはとても思えなかった。背の高くハンサムな広志には、ぴったりだ。

「優美、優美じゃないか」広志が言った。嬉しそうだ。

「広志、久しぶり」

「ほんと久しぶりだね。実家が引越したんだってね。どこにいるのかわからなくて、心配してたよ」

嘘ばかり。しかし、引越しの事まで知っていてくれたのは、優美には嬉しかった。

「きょうはバレンタインデーだからチョコ・ケーキを焼いてきたの。大学卒業したら、いよいよお別れかななんて思ってた……。バレンタインのチョコは初めてだね」

「ちよつと待ってよ」ジュリアが遮った。「思い出した。あなた、中学の卒業式の際に、広志の第二ボタンが欲しいって言ってきた子よ。そうでしょ？」

「う、うん。そう」

「広志にはわたしがいるのを知っていて、バレンタインのチョコを渡すなんて、いったいどんな神経してるの？」ジュリアは優美を睨み付けながら言った。

「いや、きょうはどの男の人だって、色んな女の人からチョコを貰うじゃない？ あんまり真剣に考えないで」優美は、ジュリアをなだめようと、笑顔を作った。

「ふーん。じゃあ、あなたは、このチョコ・ケーキを真剣に作って持ってきたわけじゃないと言っの？ 他の人にもばらまいたの？ このチョコ・ケーキは、きょうの何個目？」

「……」優美はジュリアの剣幕に太刀打ち出来なかった。紫の瞳が怖かった。

「ジュリア。せつかく作ってきてくれたのに悪いじゃないか」広志がジュリアに言った。

「何を言っの？ わたしはバレンタインのチョコは一生懸命作って、真

面目な気持ちで渡すものだと思ってる。だから広志には、そういうチョコを、わたし以外の女の人からは貰って欲しくないの。今まで何度も言ったから知ってるはずよ。わたしは間違ってる?」

「いや、間違つてはいないと思うけど……」

「もし、わたしが一緒に帰ってこなかったら、広志はあっさり受け取つてたの? そうだわ、きつとそれを狙つて、家で待っていたんだわ。やだ、この人。ストーカーみたい」

「おい。彼女は確実に会える場所を探しただけだろう。そんな言い方しなくても……」

「あ、そう? 良いわ。じゃあ貰いなさいよ。わたし帰るわ」

「ま、待てよ!」

優美は、慌てて二人に言った。

「家の前で喧嘩はやめなよ。あはは。そうよねえ。ジュリアの言つとおりだわ。わたし二人に悪い事しちゃったね。ごめんね。」

ジュリア、わたし、チョコ・ケーキを持って帰るよ。ほんとこれじゃストーカーだよ。もう二度と二人の前には現れないから安心して。広志、元気でね。これが、本当の、本当のさよなら」

優美は別れるのではなく、消えるのだ。だから連絡先も、就職先も伝えなかった。

優美は胸の前で小さく手を振ると、振り返って歩き出した。辛かった。最初で最後のチョコ・ケーキだったのに、渡す事が出来なかった。

\* \* \*

住み慣れた町だ。優美の足は、自然と昔の家の方に向かっていった。胸の中は表現出来ない不快なモヤモヤで満たされていた。「何か」をしたいが、何をすれば良いのか判らない。

家は元のままで、庭木は全部取り払われ、芝生になっていた。新しい住人には小さい子どもがいるらしい。子ども用の小さなブランコが置いてあった。変わってしまった眺めに、優美は寂しくなった。

「優美、じゃねえか。ちきしょうめ」

懐かしい声! 優美は振り返った。仕事帰りの禄太郎が立っていた。煙草をくわえている。

「ロク!」

「ロッキーって呼べ。何やってるんだ?」

禄太郎に会った途端、どっと涙があふれてきた。優美は思った。(したかった「何か」って、泣く事だったんだ)

「ロク、わたし、ストーカーって言われちゃったよあ」

立ちつくしたまま、子どものように泣きじゃくった。きょうまでの事、きょうあつた事を残らず話した。

禄太郎は、じつと聞いていた。時々、煙草の灰を落とした。優美は泣きやんだ。

話が終わると、禄太郎は言った。

「じゃあ、それ、おれにくれ」

「ええ？」

「おれにそのケーキをくれ」

「広志用に焼いたチョコ・ケーキを、渡せなかったからといって、口にあげるわけにはいかないよ」

「嫌なのか？ 好きな男に作ったケーキだからおれなんかに渡すのは嫌か？ ちきしょうめ」

「違う、違う。逆よ。ロクに失礼だって言ってるの」

「おれは、生まれてから一度も、そついつのを女から貰った事がねえ。だから食ってみてえんだ」

「うそ。わたしが何度もチョコをあげたじゃん」

「あれは既製品の義理チョコじゃねえか。手作りなんて誰からも貰った事がねえよ。こんなおれだから、これからもねえだろう。だから、いっぺんで良いから、どんな味がするもんか、食ってみてえ。そのケーキは用済みなんだろ。だったら、おれに恵んでくれよ」

仏頂面のまま、禄太郎は言った。

「わかった。じゃあ、ロクのために別なのを作ってくるよ。明日まで待つて」優美は少しずつ元気が戻ってきていた。

「おれは明日は忙しいんだ。今そこにケーキが一個余ってるじゃねえか。そいつをくれれば、話が早えだろうが。ちきしょうめ」

「ほんとにこれで良いの？」優美はラッピングしたケーキを持ち上げて、恐る恐る訊いた。

「構わねえよ。手作りなら何だって同じよ」

優美はケーキを渡した。

「わりいな。ちきしょうめ」

### [13] ロクでなしロッキー再び

夜十時になった。両親は既に寝入っている。

禄太郎は、台所に行ってフォークを一本取り、作業服のポケットに入れた。コンビニの袋も持った。

ラッピングされているチョコ・ケーキをコンビニ袋に入れると、い

つもの安全靴を履いて外に出た。鼻歌でゴーストのバラードを歌っている。向かう先は広志の家だ。

ドアベルを鳴らした。インターフォンに広志が出た。

「横尾か？ ロッキーだ。遅くにわりいけど、ちよつと門の所まで来てくれや」

「ロク！ 今行く」

すぐに広志が走ってきた。

「ロク！ 懐かしいな！」

禄太郎は煙草をくわえて火をつけた。二人が並ぶと、頭二つ分も背丈が違う。

「今は……その、何だ。例の金髪は来てるのか？ ちきしよめ」

「いや。いないよ。こんな所で立ち話も何だから、上がってくれよ」

「いや、わりいけど、おれの仕事は朝が早えんだ。もう寝る時間なんですよ、用事が済んだら帰る」

「用事って何だ？」

「きよう、優美が来たな？」

「あ、ああ……」広志の表情が暗くなった。

禄太郎は、ゆつくりとポケットからフォークを取り出した。広志はぎよつとした。

「な、何だよ。そんなもの出して」

「金髪の話は聞いた。それはそれとして、おめえはどうなんだ？ 優

美のちよこ・ケーキを受け取りたかったのか？ 違つのか？」

「受け取りたかったさ。ジュリアが言った事は酷すぎる。謝りたいんだけど連絡方法が無いんだよ」

フォークの先が、広志の心臓の方に向けられた。

「おい。ひ、引つ込めろよ。物騒な事はやめろ、ロク」

「うるせえ。じゃあ、何で、その場で金髪を叱らねえんだよ？ おめえ

の女だろうが。ちきしよめ」

「……そつだな。返す言葉もないよ」

「まあ良い。そんな事は、もうどうでも良い。いいか？ ここに、その

のちよこ・ケーキがある」

ガサガサとコンビニ袋からケーキの袋を取り出した。広志は驚いた。

「今は金髪は見ていねえ。受け取ってくれるな？」

「ああ。もちろんだ。ありがとう！」広志は嬉しそうに受け取った。

「おつと待った。そのまま持っていくんじゃねえ」禄太郎が制した。

「何？」

フォークを突き付けたまま、

「包みを開ける。ケーキを出せ」

「どこで？」

「そつだ。早くしろってんだ。ちきしょうめ」

神経質なフォークの動きが、今にも痼癢とともに胸に突き刺さりそう  
うで、広志は怯えた。

急いでラッピングを解いて、箱のフタを開き、足下に置いた。チョコ  
ケーキが、甘く優しい香りを漂わせた。

禄太郎は指先でフォークをくるりと回し、柄の方でトンと広志の胸  
を突いた。

「持て」

広志は言われるままにフォークを受け取った。フォークがこちらに  
渡れば、当面は安心だ。

「食え」

「え？」

「食うんだよ。あのな、優美の一番の願いはな、もう会えねえから、一  
度で良いから、自分が料理したものをおめえに食って欲しい、って事  
なんだよ。おれはそいつを見届けなくちゃならねえ」

それを聞いた広志は、神妙な顔になった。フォークでケーキをひと  
口大に切り分け、口に運んだ。

「で？」と禄太郎が言った。

「『で？』って何？」広志が怪訝そうに訊き返した。

「ばか！ 感想だ、感想！ うめえのか？ まずいのか？ 何か言え  
ただし正直にだぞ！」

「すごい美味しいよ。優美、上手いなあ」

「よし！ じゃ、おれは帰るぜ」

「待てよ。ロクも食べないか？ めちゃくちゃ美味いぞ」

振り返った禄太郎の瞳が、真剣で、しかもとても澄んでいるのに気  
づき、広志はハツとした。

「阿保か、おめえは？ それは、優美がおめえのために作ったケーキ  
だ。それをおれが食っちゃ、優美に失礼だろ！ 全部おまえが食うん  
だぞ。お袋さんたちに分けたりするなよ！ 約束しろ」

広志も真剣な表情で頷いた。

「約束する。ぼくが全部食べる」

禄太郎は、また鼻歌を歌い出し、歩き出した。街灯の光の外に出て、  
姿が見えなくなった。広志が呼び止めた。

「ロク！ 優美の連絡先を教えてくださいませんか。携帯の番号、知ってる  
んだろっ？」

歌が止んだ。足音が戻ってきて、小さな体が街灯のスポットライト  
の中で立ち止まった。

「横尾、おめえ、優美が好きか？」

「ああ、好きだ」

「じゃあ、優美と金髪と、どっちが好きだ？」

「……」

広志は言葉に詰まった。

「不合格！」と言い捨て、また禄太郎は去って行った。

「いまの質問に、速攻で答えられるようにならねえうちは、教えられねえ。ちきしょうめ」

ゴーストの鼻歌が遠離って行った。

\* \* \*

ゴーストの「オン・ファイアー」がリズムカルに鳴った。携帯の着メロだ。

「うぐん……誰？ こんな時間に」

優美は目を覚まし、枕元を探って携帯をつかんだ。画面を見ると禄太郎だ。

「もしもし。優美よ。ロク、どうした？」

「ロッキーって呼べ。貰ったケーキよう、考え直したら何だか食う気がなくなっちまってよ」

「えー、ちよつと失礼ねえ。もう、そんな事を言いに、わざわざ電話してきたのおく？ まあ、確かに、あまり自信はなかったからなあ、広志に食べて貰えなくて正解だったって事だよ」

声を聞けば禄太郎にはわかった。優美は、すっかり元気を取り戻している。禄太郎はほっとした。

「おれも考えたんだけどよ、これはやっぱり本来の受取人に責任とって貰うのがスジだと思ってよ」

半眼だった優美の眼が、まん丸に開いた。布団をはね除け、ベッドの上で飛び起きた。

鋭く低い声で問い詰めた。

「ちよつと！ ロク、何したのよ!？」

「横尾の家に行つて渡したぜ」

「げ！ 何してくれるのよ！ 広志、受け取らなかったでしょ」

「いや。おれ、渡す前にちゃんと訊いたぜ。受け取りてえのか、いらねえのかどつちだつて。そしたら、本当は欲しかったって言うから渡したぜ」

「ええ〜？ ほんと〜!?でも家にジュリアがいたら、そのまま捨てられるかもね。それでも手渡せただけで充分だよ！ ありがとう！ 口

ク！ 嬉しいよ」

「先走るんじゃねえ。ちゃんと人の話を聞きやがれ。まず、今夜は金髪はいねえって言った。ありや嘘じゃねえぜ。おれに家にながれって言ったからな。断ったけどよ。」

それから、おめえの一番の望みは、おめえが作ったものを食って貰う事だったんだろ？ だから、おれ、門の所で包みを開けさせて、フオークを渡してひと口食わせた。この目でちゃんと見たぜ」

「……」

「おい、優美、聞いてんのか？」

「ロク~~~~う」優美は声が裏返って、幽霊のようだった。「わたしスイツチ入りそう。泣いて良い？」

「まだ早えよ。続きがある。正直に感想を言えって言ったら、『すごい美味しいよ。優美、上手いなあ』って言うてた。これもお世辞じゃねえはずだ。あんまり美味いから、おれにも食ってみろって言うたからな。おれはケーキなんか見ただけで胸焼けしたから、食わなかったけどよ。あと、おめえが横尾のために作ったケーキだから、家族で分けたりしねえで、必ずあいつが一人で全部食べると約束させたぜ」

「ふえ~~~~ん。あで、づぐるどに4じがんもががっただんだ。うでしひよ~~~~」

「何言つてんだか、わかんねえよ。泣くか喋るか、どっちかにしろ」

「ロク~~~~。あでいがどう~~~~」声と涙と鼻水が同時に出ているので、かなり判りにくいのが、取りあえず感謝はしているようだ。

「そのー、何だ。よくわかんねえけど、こつこつなのは、その日のうちに知った方が嬉しいんだろ？ 日付変わる前に伝えたからな。以上、『ロクでなしロツキー』の報告は終了。ちきしょうめ」

電話が切れた。優美は時計を見た。11時55分。また泣けてきた。  
「ろく~~~~!!」

優美が、月夜のオオカミのような意味不明の雄叫びを上げた頃、禄太郎は一升瓶を傾けて、四杯目の酒をコップに注いでいた。

「ったく。おれも食ってみてえよ。ちきしょうめ」

#### [14] ゴールインおめでとつ(23歳)

三ヶ月間の会社の研修期間が終わり、優美たち新入社員は配属先が決められた。本格的な仕事の始まりだ。

商社だけあって、資料室には各業界の業界誌がほとんど揃っていた。優美はある日、自動車業界誌のあるページに、広志の名前を見つけ

た。

「ドヨタ東日本販売（株）横尾社長の長男広志氏（23歳）がご結婚。お相手は景塚貿易（株）景塚社長の長女ジュリアさん（22歳）」

片隅に掲載された、たったそれだけの短い記事だった。

優美は心の中で呟いた。「広志、ジュリア。ゴールインおめでとう。わたしもいい加減、広志病を卒業しないとね……」

自分は誰と結婚するのだろうか？ 優美は、いままで広志の事しか頭になかったので、他の誰かと結婚する事など想像した事もなかった。

[15] 再会へーゴーストライター、ブレイクする（25歳）

九年間も鳴かず飛ばずだったゴーストライターが、ついに2019年8月、ビルボード誌チャート初登場1位という大ヒット曲「ショートカット（近道）」を生んだ。これを引き金に次々とヒットを飛ばしたゴーストは、長い眠りから覚醒したかのようにたちまちトップ・アーティストの仲間入りをした。

そして、デビュー十年目になる2020年4月から、世界中のファンが待ち望んでいた、初のワールドツアーが決行される事になった。

\* \* \*

日本公演は5月10日ワンナイト・ライブ。場所は御台場スーパードームに決定。3月1日にチケット販売開始となった。

ファンクラブの会報に、「アリーナ前方のチケットが売っている可能性の高い販売所」が載った。アリーナ席は全席指定だ。

禄太郎は会報に載った販売所の中から一つを選び、発売二日前の朝、酒と缶詰と寝袋を持ち、先頭に場所を構えた。その夜は、明け方冷たい雨になった。

「ちきしょうめ」雨具を忘れてきた禄太郎は震えながら、耐えていた。二日前には百人近くの列が出来た。

前日の昼には数百メートルの列が出来た。壮観だ。あのゴーストのファンがこんなに増える日が来るとは……。

夜は満天の星になった。

「すごい。綺麗な星」

後ろの方に並んでいるアベックが、空を見上げて大きな声を上げた。酒を飲んでいた禄太郎も、思わず見上げた。禄太郎は星の事は何も知らない。ただ一つ、子どもの頃に優美が教えてくれたカシオペア座だ

けは形を憶えていたので、星空を探した。あつた！  
「へっへっへ。相変わらずWの形だな。ちきしょうめ」禄太郎は、まだ見失わずにカシオペア座を見つけられた事が嬉しくて酒をあおった。

\* \* \*

発売日の午前九時になった。禄太郎は寝袋と空の一升瓶を持って立ち上がった。伸びたヒゲ。埃にまみれた髪の毛。油だらけの作業服。まるでホームレスと間違われそうな風体だ。いや、実際三日間ホームレス状態だったのだ。

販売所の窓口が開くのを待った。やがて、窓口を覆っていたカーテンが開いた。

「はい、お待たせしました。この紙から座席を選んでください」座席図だ。所々、黒く塗りつぶされている。広告主などのスポンサー枠や、この販売所で扱っていない席だろう。

ファンクラブ会報の情報は正しかった。虫食い状に、アリーナ前方の席がある。あまりステージに近すぎるとモニター・スピーカーなどがかぶつて見にくくなる。前から4〜10列目の中央がベストだろう。ちょうど、そのあたりに空席がいくつかあった。

「F 25番」そう告げると、金を置いてチケットを受け取った。日の当たっている歩道の縁石まで出て、光の下でチケットをしみじみと見つけた。全面黒で金文字の印刷だ。

10年間待ったゴーストライターのライブチケットだ。初めて聴いたときは中学生だった。待ち続けた初ライブ、いつしか25歳になっていた。待つてるだろうな、あいつらも……。

優美の顔が浮かんできた。もうずいぶん会っていない。禄太郎の頭の中で何かがキーンと鳴った。

「お客さん！ お客さん！」振り返ると、販売員が中腰になって叫んでいる。「お客さん、お釣り忘れてますってば！」2番目以降の客たちが、チケットを買えずにイライラした様子で禄太郎を見ている。

まだ間に合う！ 禄太郎は窓口に飛びついて叫んだ。「おっさん！ F-26番もくれー！」

\* \* \*

「ちきしょうめ」

夜、三日ぶりに風呂に入った禄太郎は、テーブルに置いた自分の携帯を睨み付けながら酒をあおっていた。衝動的に優美の分も買ってし

まったが、どうやって誘えば良いか判らない。経験もない。こういう事に限って度胸もない。

考えあぐねて酒をあまり続けるうちにすっかり酔ってしまった。家全体が傾いて見える。実際は、家ではなく禄太郎が傾いているのだ。もう電話は無理だ。寝よう。

その途端、携帯が光って、勇ましい曲が流れ出した。ゴーストの「スタート・ナウ」だ。液晶画面を覗いた。

「鏡 優美」

優美だ！ 禄太郎はあわてた。掴もうとするが携帯が逃げる。テールブルが波打って邪魔をしている。

泥酔状態の男は神をも凌ぐ力を持つ。世界を揺るがし、天変地異を起こす。ただし個人的に。

(き、切れちまう……)

やっと捕まえた。通話ボタンを押した。

「ロロロ……ロツヒーだ」

「やだな。ロク、酔ってるの？」 優美は呆れた。

「い、いや。だいひょうぶら」

「だめだよ。何言っても、忘れちゃうね。その様子だと」

「切るらー！ ちひしょうめ」

「あわてなくても大丈夫。必ず明日かけ直すから、きょうは寝なよ」

電話が切れた。神は、男の(個人的に)危険な力を封印するため、睡魔を派遣した。

\* \* \*

翌日の朝、再び優美から電話があった。

「酔いは醒めた？ 二日酔いになってない？」

「おう大丈夫よ。だいたい、おめえ、昨日だって大丈夫だったんだ」

「はいはい」

優美は相手にしなかった。

「ロクさ、知ってるよね？ ゴーストが来日するの。ファンクラブの会報読んででしょ？」

「『』たりめーよ。ちきしょうめ」

優美は間髪を入れず、禄太郎にピッタリ息を合わせて物真似を重ねて見せた。見事なユニゾンに不意を突かれた禄太郎は驚いた。「こいつ、上手すぎる……」。

「でき、一緒に観に行かない？ いちおう何とか二枚、チケット押さえられたんだ。スタンド席だから当日の席取りが大変だけだね。うちの会社のコネをフルに使ったんだけど、これが精一杯だったよ。6万人分ある御台場スーパードームのスタンド席が、発売開始10分で売り切れだよ。まったくすごいブレイクぶりだよ。ネット販売なんか、受付開始後30秒で回線がパンクして、ボタンを押す事も出来なくなっただって」

（助かった！ 優美の方から言っなきゃ良かった。誘う手間が省けたぜ）

「そのチケットは誰かに売ってやれ」

「はい？ 何で？」

「へっへっへ。ここにアリーナ席のチケットが二枚ある。ざまあ見やがれてんだ。ちきしょうめ」

「な、何々、アリーナ席!? なぜ!? なにゆえに!? ロク、どうやったの、一体！」

「ロッキーって呼べ。驚くのはまだ早いぜ。座席番号を聞け」

「何番？ 何番なの？」 優美のじれったい思いが声に表れている。

「F-25番と26番だ」

「ひ~~~~！ 何、その絶好のポジション!? 嘘でしょ？ あり得ない！」 禄太郎は高笑いをした。

優美は、夕方にぜひ会いたいと言い、喫茶店で待ち合わせる事になった。

\* \* \*

日が沈みかけている。外の車通りが激しくなってきた。帰宅のラッシュだ。

「こいつがアリーナ席のチケットだ」 禄太郎は自慢げにテーブルに置いた。

「うわー、後光が差して見えるよ。あれ？ 実際、作りがスタンド席のチケットと違うじゃん」

優美はバッグから自分のチケットを出してみた。

「確かに違うよ。まず紙からして良い紙を使っているし、凸凹のある加工をしてる！ それに厚い！」

思わずため息をついた。すると、そのため息で、スタンド席のチケットが少し滑って動いた。アリーナ席のチケットはびくともしない。優美は吹き出した。「これじゃ漫画だよ」

「ねえ、どうやって手に入れたの？」

「こういう時はハイテクじゃ駄目って事よ。ローテク、ローテク。会

報に載つてた販売所によ、寝袋持って三日前から並んだのよ。もちろん先頭だぜ」

「すご！ ロクらしいよ」

優美は感心した。しかし、すぐに視線が天井をさまよった。

「あれ？」

「どうした？」

「ロク、何で二枚買ったの？」

いきなり、ストライクゾーンと真ん中の質問が飛んできて、禄太郎は焦った。

「あ、いや……」タベは、5時間かかっても誘えずに酔いつぶれたのだ。いま言葉が見つかる訳がない。

その様子を見て優美は微笑んだ。

「良いよ。答えなくて。ありがと。嬉しいよ」

禄太郎はほっとした。

その後、二人はしばらく、ゴーストの話で盛り上がった。

「ロク、話変わるけどさ……」

「何だ？」

「ロクは将来の事とか何か考えてる？」

「将来の事って何でい？」

「結婚とか家庭の事だよ」

禄太郎は思わぬ質問にどきまぎした。

「そ、そんな事考えたことねえよ。そもそもよ」 頬を叩いて見せた。「こんな見てくれるのわりい奴の所に来る嫁さんなんて、いると思つか？」

「そんな事ないよ。」

あのさ、わたしたち、すごく長い縁じゃない？ 何考えてんのか大体わかつちやつくらいでしょ？ だからさ、ちゃんとそのつもりになって付き合ったら、それなりの格好が付くと思っんだ。考えてみない？」何を言い出しやがるんだ、こいつは。禄太郎は目を伏せた。「『考えてみない？』じゃねえよ。ずっとそればかり夢見てきたっての。だが、話がそう簡単じゃねえから困るんだろつが、ちきしょうめ」

「おめえは……おめえは、それが一番だと思つのかよ？」目を伏せたまま小さな声で言った。

「思つよ」

「じゃ、聞けげむい」顔を上げて優美を見た。「広志の事はぶっきたのかよ？」

優美は下唇を噛んだ。

「べっなんだ？」

「……もう終わったよ。広志は結婚したんだよ」

禄太郎は、それを見て確信した。(全然、終わってねえ！『何考えてんのか大体わかっちゃう』って、てめえで言ったばかりじゃねえか。隠してもおれにはバレバレなんだよ！)

「おれはどうだって構わねえよ。広志の事を引きずったままでも気にしねえ。そら無理もねえよ。あんだけ好きだったんだからよ。」

おれは、どうせまともに女に付き合っただけで貰えるなんて、はなっから思っただけ。だから、代用品だろうが、ピンチヒッターだろうが、使っただけ。捨てるのが、何でも良い。優美の気に入るようにするぜ」

「ロク！ そんなひどい事考えてないよ。ロクの事は真剣に考えてるんだよ」

禄太郎は、思わぬ展開に胸が高鳴っていた。長い間、夢のまた夢に過ぎなかった優美との結婚が、現実のものになるかも知れないのだ。

だが今の禄太郎は、世間知らずの少年時代とは違う。冷静に、外側から自分や優美を見つめられる目を持っている。

「まあ良いや。ただし条件がある」

「何よ？」

「確かに、おめえの言うとおり、おれは、何も言わなくてもおめえの事が判る。事によっちゃあ、おめえ自身より判るんだよ。」

だから言うんだけどよ、おれは最後にしろ。どう考えても、おめえほどの女には損な買い物だ。

おめえなら会社で合コンの誘いなんか数え切れなくれえあるだろ？ 相手も一流企業ばかり、より取り見取りのはずだ。

おめえの事だから、それを全部断ってるだろ？」

「……」 凶星だった。ほぼ毎日のように、あちらこちらから声がかかる。興味が湧かないので全部、断っていた。しかし、断つても、断つても、誘われていた。振り返ると、大学時代からそうだった。優美の美貌に一目惚れする男は、掃いて捨てるくらいいるのだ。

「まずは、それを全部受ける。レベルもおめえに釣り合っくれえで、真面目におめえの事を考えてくれる野郎が、結構いるはずだ。そいつらを、ちゃんと見る。一通り見て、どうしても……おれは、そんな事あり得ねえと思うけどよ……どうしても、コレっていうのが見つからなかったら、それからおれにしろ。どうだ？ わかったか？ ちきしょめ」

優美は諭「さと」すように言った。

「だから、いまロクが言ってる事自体が答えそのものなんだよ。」

そこまでわたしの事を判ってくれる超能力まがいの力を持った人が他にいるわけじゃないじゃん。

ロクと20年もかかって作ってきたものなんだよ。それがあるから、わたしは、ロクなら安心して過ごせるんだよ。

ロクが条件だつて言うなら、合コン全部受けてみるよ。でも何も変わらない事は判りきつてるよ」

優美の真剣さが、禄太郎には嬉しい一方で、悲しくもあつた。優美はいくつもの小さな間違いを見過ごしている。真剣なら真剣なほど、それらに早く気づいてしまつたろう。

[16] さよなら、ロクでなしロックー

5月10日がやってきた。ついにゴーストライターの日本公演が実現するのだ。

「アリーナ席なのに、何だつてこんな早くに行くんだよ？ ちきしょめ」

電車の吊革にぶら下がるようにして、禄太郎が文句を言った。まだ朝の6時だつた。開場は11時、開演は12時なのだ。

「出来るだけ早く会場に入つてさ、人の分までいっぱい空気を吸って独り占めしてやるんだよ。すべてのシーンを目に焼き付けて、すべての音を耳で受けとめて、すべての雰囲気吸収しなくちゃ。待ち続けた10年分だよ」

優美は興奮しつ放しだつた。

「横尾や向井……おつと五十嵐か、あいつらも会場のどこかにいるに違いねえ。ばつたり出くわすかもな」

「あはは。6万5千人だよ。会えるわけないじゃん。しかも、わたしたちは、奇跡のアリーナ席ベストポジションだもんね。」

でもね、先週、由香から電話来たんだよ。由香の実家に、連絡付いたらかけて欲しいつて、携帯の番号を教えてあつたの。それで電話来たんだ。話し込んだじやつたよ」

「ほんとか。五十嵐は今何してやがるんだ？」

「それがさ、笑つちや悪いんだけど、五十嵐じゃないの。また向井に戻つてるの。旦那と別れて実家に帰ってきたんだつてさ。」

舞台の上の五十嵐さんに一目惚れしたんだけど、役者さんは、舞台と日常は、まったく違うといことを知つたんだつて。それで、旦那がただのつまらない男の人だつて判つて、冷めちゃつたんだつてさ。由香らしいよね。きょうは無理だけど、近いうちに会えるね」

「横尾は何してやがるんだろつな」

「広志は優しいから、ジュリアを大切にしてるはずだよ。もしかした

ら、もう子どももいるんじゃないかな。広志とジュリアの子どもなんて、男女どっちにしても美男美女決定だよ。きょうは家族で観に来るんじゃない？」

禄太郎は、微笑みながら話す優美の美しい横顔を見ていた。禄太郎には、笑顔の裏にある大きな寂しさが、はっきりと判った。その寂しさを埋めるなり、消すなり、何とかしてやりたいと思った。しかし禄太郎にはどうしてやることもできない。それがもどかしかった。

電車を降りて、御台場スーパードーム直行のシャトルバスに乗り換え。良い天気だ。

やがて、銀色の巨大なドームが遠くに現れ、また、フリーマーケットなどに利用される、ドームの10倍の面積を持つ広大なコンクリートのフロントスペースが見えた。

「ロク！　すごい！」窓に額を押しつけて、優美が叫んだ。フロントスペースに、警備員に誘導されて整然と並ぶ、膨大な数の観客たちがいた。もう一人には達しているだろう。

シャトルバスは、ドームを挟んでフロントスペースと反対側に広がるパーキング・エリアに入り、停まった。

バスを降りると、優美は走り出した。禄太郎も仕方なく走る。二人は、長い長い列の一番後ろに着いた。

「すげえ数だな。スタンド席のやつらは、そりゃ必死だよ。みんな目つきが怖えよ」

「そうだよねえ。何か、わたしたちがここにいるのは、みんなに悪いね」

「だから、早えって言ったじゃねえか」

「でも、わたしたちはデビューからずっと応援してきた老舗ファンだよ。威張って良いんだよ。」

みんな、若い子たちじゃん。きっとこの子たち、ブレイクした『近道』がデビュー曲だと思いこんでるよ」

「言ってるな」

「ロク、『近道』の歌詞知ってる？」

「知らねえよ」

「CDの歌詞カードに日本語訳載ってるじゃん」

「あんな小っちゃえ字なんか読まねえよ。頭が痛くなるんだ、ちきしょめ」

「しょうがないなあ。簡単に言つとね」

世の中便利だ。どこに行くにも近道がある。

スーパー、野球場、サッカー場、必ず近道がある。

だから君の心にたどり着くのも、近道があると思っていた。

近道を探していた。  
だけどわかったよ。

君の心にたどり着くの、便利な道なんてない。  
近道なんてなかったんだ。

真剣に、ひたすら真剣に歩かなければ、君の心には届かない。  
君の心にたどり着いた今、振り返ってみた。

そして気がついた。歩いてきた道は真つ直ぐだった。

これが本物の『近道』だったんだ。

本物の『近道』は探すものじゃない。

たどった後に気がつくものなんだ。

だから今は歩こう。何も考えず真剣に、ひたすら真剣に歩こう。

もしたどり着く事が出来たら、それが本物の『近道』だったんだ。

という内容だよ。ゴーストのたどってきた道そのものだよ。

でも、きつと、ここにいるほとんどの子たちは、そんな事知らない  
と思うよ。」

「……近道か」 禄太郎は、優美の教えてくれた歌詞を頭の中で繰り返  
していた。

\* \* \*

煙草が無くなった。禄太郎は腕時計を見た。やれやれ、まだ8時だ。

「コンビニでも探して、煙草買ってくらあ。」

「こんなどこにコンビニなんてあるの?」

「立ってんのも飽きちまったよ。歩いてりゃ、そのうち煙草ぐれえ手  
に入るだろう。どうせ時間は腐るほどあるんだしよ。」

「それもそうだね。」

「じゃあな。」

「ちよつと! 戻って来るのに、何で手を振るのよ?」

「何でだろ? うっかり振っちゃった。ちきしょうめ」 禄太郎は苦笑  
した。

禄太郎は、観客の列に沿って歩き始めた。列は、ものすごい長さに  
なっている。

5分ほど歩いただろうか。

「あ」(横尾だ)

群衆の中に、ひとり頭の出た、長身の男を見つけた。広志だった。

「横尾、じゃねえか。」

禄太郎が声をかけると、広志は嬉しそうに笑った。

「ロク! そうだよな。やっぱり来るよな。あのゴーストが大ブレイ

クして日本まで来るんだから、絶対観たいよな！ きょうは四人とも会場のどこかにいるはずだと思ってたよ。

「けど、すごい偶然だな。この人数の中ではったり会うなんてさ」

「何だ、おめえ、ひとりか？ ああ、そっぴや金髪はゴーストが判らねえ女だったもんな。一緒に来てくれなかつたんだな」

「いや。違うよ」広志の顔が曇った。「ジュリアとは離婚したんだ」  
「何？」

「親父の会社も辞めた。いまは別の小さな会社の一番下で頑張ってるよ。すべて公にしてない事だけだね。

「いろんな間違いに気がついて、人生やり直す事にしたんだ」

「禄太郎は空を向いて目を閉じた。眉をひそめている。

「ロク、どうした？」

「うるせえ！ ちょっと黙ってる。頭使うのに慣れてねえおれが、上げえ難しい事考えてるんだ」

「混乱しているの、まず状況を整理するのが大変だった。禄太郎の頭はゆっくりとしか回転してくれない。

目を開けて、広志を見上げながら、確認した。

「おめえ、子どもはいるのか？」

「いや。いないよ」

「そうか」

「また、目を閉じて、状況の整理を続けた。時々呟く。……子どもは、いない、と……」「ふむ」ようやく頭がスムーズに動き始めてくれた。

「よし、話は見えたぞ……」

それから、いろいろ考え始めた。

「禄太郎は、その場で小さな円を描いて歩いた。目は閉じたまま。時々「ふん」「いや」「そうだ」などとぶつぶつ呟いている。何度か首をかしげた。

「5分くらいたって、目を開けた。広志の不思議そうな顔が小さな禄太郎を見下ろしている。

「ちよつと訊くけどよ」

「少し間が開いた。

「おめえ、優美の事、まだ好きか？」

「広志は、ふつ、と息を吐いた。少し肩が落ちた。

「ああ。忘れられないよ。優美が消えてもつ3年になるんだな

「馬鹿だったな。いまやつと判るよ。優美は最高の女性だよ。それが身近にいたのに……」

「禄太郎はまた目を閉じて、円を描き始めた。首を何度もかしげ、ついに右手と左手でそれぞれ皿を作り、「こつか？」「こつか？」「こつか？」

「待てよ？」と言いながら、天秤のように左右の手を上下に動かし出した。

10分もたっただろうか。

「よし！」 禄太郎は、強く頷いた。

「横尾、おめえ『近道』の歌詞知ってるか？」

「え？『近道』？ いや、ちゃんと読んでないな」

「馬鹿野郎。すげえ良い歌なんだぞ。良いか」と、優美に教わったばかりの歌詞を、そっくりそのまま受け売りして聞かせた。

「忘れるんじゃないぞ。『本物の近道』はな、探しても駄目なんだ。真剣に歩いてみてよう、後から気がつくもんなんだ」

「判ったよ」と広志は言ったが、実際は何が何だかさっぱり判らなかつた。

「前回は不合格だったがよ、きょうは特別に合格として認めてやらあ。近道を探したりするんじゃないぞ。とにかく真剣にやれ」

禄太郎はポケットからチケットを出した。

「良いか、これからは、おれの事を必ず『ロッキー』って呼べ。ちきしようめ」

チケットを広志の胸に叩きつけた。

「持ってけ、ドロボー」

「何だよ？ これ」

「良いから持つてる。すぐに判る。もうへマするんじゃないぞー！」

呆気にとられたままの広志に背を向け、禄太郎はずんずん歩き始めた。

「ちきしようめ。ちきしようめ。ちきしようめ……」

数え切れないくらい、口癖を繰り返した。

「けつ。おれは、ちよつとやさつとじゃ泣かねえぞ」

帰りがたがわからない事に気づいた。取りあえずドームの向こう側のバス乗り場に行けば、何とかなるだろう。

「見つかねえように、うんと遠回りしねえとな」

ごった返す観客たちの群れから離れて、敷地の端を目指して歩いた。

「ロッキー！ 待つてえ！ ロッキー！」

誰だ!? 生まれて初めて、他人から「ロッキー」と呼ばれた。禄太郎は振り返った。

女性が走ってくる。

「はあー、追いついた！」 息を弾ませながら、禄太郎にすがった。

「おめえ向井か？」

「うん。ロッキー久しぶり！」

「どうしたんだよ？」

「見てたよ。バッチリ全部、見せて貰ったよ。いやあ、ロッキー、男だよ。あっぱれだね」

「おめえ、どこにいたんだよ？」

「いや並んでたらさ、列の横を歩いてくる人がいて、よく見たら、ロッキーじゃない。すれ違って、やっぱり間違いないと思って、声かけようとしたんだ。そしたら、広志もいて、びっくりしたよ。」

何か声かけにくい雰囲気だったから、取りあえず近くまで行って、人の影に隠れて覗いてたんだ。

こないだ優美に電話して、色々話は聞いてたから、わたしドキドキしちゃったよ」

「くだらねえ事は、全部忘れろ、ちきしょうめ」

「ロッキーさ、広志に挨拶だけして、黙って戻ってたら、優美と結婚出来たんだよ。わたしは絶対そうするって思ったよ。」

「けど、たまげたね。チケット渡しちゃうんだもの！」

本物の男を見たよ。

まさに映画のロッキーだったよ。

立派だよ」

「そんなんじゃないよ。おれあ、単に頭ん中で、二人の優美を比べてただけだ。おれと一緒になる優美と、横尾と一緒になる優美をよ。それで、どっちが幸せそうか天秤にかけたままでよ」

「優美も言っただよ。そうやって、違う優美をキッチリ予想出来るのは、ロッキーしかないんだよ。広志にも不可能。」

優美を知り尽くしているロッキーだけが、出来るんだよ。

わたしもさ、何となく最終的に天秤勝負になる事と、それに気がつくのがロッキーだけだったとこまでは、判ってた。だけど、まさか、その結果に正直に従うとは思わなかったよ！ 仰天したよ！ こりゃ男の中の男か、単なる馬鹿のどっちかだと思った」

「けっ。好きに呼べ」

「ロッキーは絶対、間違っでないよ。最終的に優美が最も幸せになれる道だよ。優美には、当分わからないかも知れないけど、ロッキーは『本物の近道』をプレゼントしたんだよ。」

「けど、あんな辛い結果を選べるなんて凄いよ。』ロクでなしロッキー』の完結編を見せて貰ったよ」

「いつまでも、つまんねえ事喋ってんじゃねえよ」

由香は、禄太郎の右腕に抱きついた。

「ね？ きょう、これからどうするの？」

禄太郎は、うろたえた。

「ま、まだ考えてねえよ。結局、朝っぱらから、人混み見物に来ただけだったな」

「じゃさ、飲みに行こうよ！」

「馬鹿か？ おめえ。どこに朝から酒を飲ませる店があるんだよ？」

「どっか、あるよ。なかったらさ、駅のホームでカップ酒でも買って、一杯やりながら、飲み屋が開くのを待とうよ」

「お、おめえ、女か？ おれでも、さすがにそこまではやらねえぞ」

「わたし、チケツト渡したの見て、完全にKOされちゃった」

本物の男が、こんなところにいたなんて盲点だったなあ。

ロッキーにくっついて行くって決めたよ。

優美も良いけどさ、わたしも結構いい女だよ。ぶっちゃけ、わたしじゃ駄目？」

「おめえなあ、それを言うのは何人目だ？」由香が指を折って数え始めたので、禄太郎はすぐにとめた。「やめる。知りたくもねえよ。知ったら余計、引く」

「いや、この感覚は今までとは違って、特別に思うんだよねえ」

「それも、言ったのは何人目だ？ いや、おい！ 指を引っ込めろ」

二人の珍問答はバス乗り場まで延々と続いた。

禄太郎は、由香に感謝していた。(ひとりで帰「け」えるのは、さすがに辛すぎる所だったぜ。助かったよ)

優美にはもう「ロクでなしロッキー」は必要ないだろう。おれのためにも、幸せになりやがれ、禄太郎は胸の中で優美にそう呼びかけた。

ぐるぐる回って考え込んでいたとき、禄太郎の頭の中で、広志と一緒にになった優美が最高に幸せそうに見えた。そのとき気づいたのだ。その優美を見たい、と。寂しいが、それ以上に、その優美を見ることが自分も最高に嬉しく感じると、禄太郎は判ったのだった。

「ちきしょうめ。結局観れなかったぜ。ゴースト、また日本に来やがるかな？ これつきりじゃねえだろうな？」禄太郎が言った。

由香がその横顔を頼もしそうに見つめながら、微笑んだ。

「来るよ。ロッキー。きつとまた来るよ。そのときは、アリーナ席前方を4シートぶち抜きでチケツト頼むね！」

(了)